

事実から真実へ

山脇あさ子

子どもは「本当にあった話」に対して貪欲である。自分をとりまく世界の事を知りたい、真実を知りたいとの思いを常に抱えている。一つ事実を知れば、一つ新しい世界が開ける。生活歴の浅い子どもにとって、一つの事実の持つ重みは、大人とは比較にならないほど大きい。その事実を追跡し、そこに潜む人間の真実に迫る、即ち子どもの旺盛な知的欲求を、事実と真実で満たす、それがノンフィクションである。

二〇〇九年度では、子どもの活躍を扱った作品が少なく、さらにそれらを子どもの視点で描く作品は皆無であった。子どもの視点では、ノンフィクションに不可欠の全体像を的確に捉え、事柄を正確に位置付ける視野の獲得が難しい

のと、一方に、事実を素にしたフィクション、という表現手段があり、子どもの活躍、視点はフィクション化の方に流れるからであろう。

一年を振り返るにあたり、作品群を以下の三つのグループに分けてみた。対象年齢、テーマによらず、取りあげた事件（事柄）が完結したもの、即ち事件の始まりから終わりまでの顛末を描いたものをA、事件（事柄）がまだ進行形である、即ち描かれた運動や、活動が現在も続いているものをB、啓蒙を趣旨とする、一般書では専門書の分野であるものをCのグループとした。

Aのグループから。このグループは、事件が完結することから、事件自体の持つ物語性と、事実の持つ説得力によって、読み応えのある魅力ある作品が多い。さらには人間の真実がいかに描かれたかが問われる。

一代記ともいえるもので『クラウディアの祈り』（村尾靖子 ポプラ社）は、太平洋戦争の終戦時にソ連軍に捕らえられ、スパイ容疑で抑留され、51年間日本に帰れなかった蜂谷彌三郎氏の過酷な人生を描く。タイトルのクラウディアは、彼の妻であったが、日本に妻子があったと知ると、ロシアに留まった女性の名である。想像を絶する過酷な世界と、そこを生き抜いた人物の軌跡、複雑な人間模様が誠実に記されているが、随所に現れる取材事情が、うねりとなって迫る物語性を削いでいる。同じ太平洋戦争だが、野